軍事郵便を手がかりに対人援助を考える

Reflecting on Interpersonal Support through Military Mail

八田 友和

HATTA Tomokazu

公益財団法人こども財団

Kodomo Foundation, Public Interest Incorporated Foundation

Key words: 対人援助、軍事郵便、

研究の背景と目的

本研究の目的は、軍事郵便のやり取りを手がかりに、現代の対人援助実践のあり方を模索することにある。近年の対人援助の実践は SNS やオンラインを活用した非対面での支援が増加している。一方で、言葉や文字のみで相手に思いや感情を伝えることの難しさは、様々な場面で指摘されている。そこで本研究では、戦時下の軍事郵便のやり取りを事例に、そこに表れる対人援助の営みを分析することで対人援助の在り方について考えたい。

軍事郵便とは

- (1) **軍事郵便**: 「戦地もしくはそれに准ずる地に派遣されている軍隊や軍艦、軍人・軍属から出された郵便物、およびそこに宛てた郵便物」と定義することができる。書状や葉書だけでなく、戦地に送られた定期刊行物や印刷物、小包なども含まれる。軍事郵便は、戦地と国内を結ぶ、ほぼ唯一のコミュニケーションツールとして、兵士と家族、知人を結んでいた。
- (2) **軍事郵便制度**: 日清戦争を契機に制度化され、日露戦争や日中戦争、太平洋戦争時などに運用された。なお 1937~1941 年の平均年間取扱量は約 4 億通であり、広く国民が利用していた。

軍事郵便と対人援助に関する先行研究

軍事郵便のやり取りが当事者間に与えた影響については、新井 2008、2011、後藤 2011 をはじめとした様々な論考で指摘されている。また、葉書や手紙の差出人や家族による軍事郵便の翻刻が自費出版や私家版として記録されているケースも散見される。加えて、博物館展示として軍事郵便ややり取りが展示されることもある。

方法

本研究では、こもれび博物館が所蔵する軍事郵便資料に加え、軍事郵便を翻刻、出版している書籍を取り上げ、文面の内容分析（家族への気遣い、励まし、安心感を与える言葉など）をおこなった。具体的には、古沢岩美『軍事郵便』（1997 年）、山口ひとえ『百七通の軍事郵便』（2007 年）などを分析対象とした。

結果と考察

- 軍事郵便の内容分析（「励ましの表現」、「思い出の共有」、「安心させる表現」など）をおこなった。
- (1) **励ましの表現**: 「目標は遠大に実行は朝夕一歩たれ」、「将来を期して大いに勉強してくれ」、「たとえ駄目でも心配しちゃだめだよ。いくらでも他に延びる方法があるんだからね」など。
 - (2) **思い出や感情の共有**: 「父上の元気なりしは懐しく涙禁じ得ず」、「僕達はとてホガラかだ。そして元氣澁刺としている」など
 - (3) **安心させる表現**: 「此方に居ると全然雑念なんか起こらないね」、「当地は今ちょうど内地の 6 月頃の気候でとても住み良い処です」など
 - (4) **その他**: 「援助依頼」、「情緒の共感」といった視点で内容分析をおこなった。

軍事郵便は、戦地と国内を繋ぐだけでなく「受け手の行動を促すメッセージ」や「日常生活の共有や近況報告を通じた心理的な繋がり」といった意味を持ち合わせていたことが明らかになった。また、葉書や手紙の存在そのものが不安の軽減に繋がったと思われる。

今後の展望としては、軍事郵便そのものが家族にとって生存を伝える「いのちの便り」であったことから、軍事郵便がグリーンフケアとして果たした役割を考察することなどが挙げられる。

謝辞

本研究を行うにあたって、こもれび博物館から資料等を提供いただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

引用参考文献

- ・新井勝紘「『軍事郵便』の形成とその歴史力」『郵政資料館研究紀要』第 2 号、郵政資料館、2011 年
- ・新井勝紘「軍事郵便への複線的アプローチ」『郵便史研究』第 25 号、郵便史研究会、2008 年
- ・後藤康行「戦時下における軍事郵便の社会的機能」『郵政資料館研究紀要』第 2 号、郵政資料館、2011 年
- ・国立歴史民俗博物館（編）「特集 軍事郵便と戦争・兵士」『歴博』第 189 号、2015 年